

10/11

大分県立竹田高等学校関東同窓会
第8回総会・懇親会



東京に「荒神」が舞った



大分県立竹田高等学校
関東同窓会
会報

第11号

発行者・会長 伊東七五三八
編集者・足立 五郎
発行所・関東同窓会事務所
東京都千代田区永田町2-4-11
フレンドビル7F
03-5251-2730

印刷(株)イフ・フォーラム
東京都新宿区早稲田鶴巻町 552
千田ビル302 ☎03-3207-8064

大分県立 竹田高等学校
第八回総会・懇親会
平成六年六月二五日(土)
新高輪プリンスホテル
国際館 パミール 香雲

司会 佐藤映之(幹事長)
開会のことば
渡辺正治(副会長)
会長のあいさつ
伊東七五三八(会長)
会務および会計報告
佐藤映之(幹事長)
渡辺真一(総務委員長)
監査報告
吉田 忠(監査)
閉会のことば
後藤鉄石(相談役)

総会は、つつがなく終了し懇親会へ席

座が一気に華やぐ。

無事の再会を喜ぶ、竹田弁が飛び交う。当番幹事の八木洋子さんの見事な司会で、懇親会は幕を開いた。

なごやかな賑わいを見せて、暖い時は刻まれてゆく。遠くふる里を偲びながら、竹田に生まれて本当に良かったとしみじみ思う。

竹田があるから、いまがある。懐かしきかなふる里であり、有難きかな友垣よである。

乾杯の後、クライマックスは突然訪れた――

会場に設えられた舞台上に勇壮な太鼓が響き、お神楽が始まった。思いもかけない演出に驚き、あわててプログラムを開く。

登場した荒神に、忘れ去っていた少年の時代が鮮やかに甦る。

荒神をドクと呼び、へボと呼んだ子供の頃の、祭りの光景が昨日のように思い返される。戦後の貧しさはあったが、

取り戻した平和に希望があふれ、街は賑わっていた。

テレビもなければ、ラジオ

はNHK放送一局の時代であ

る。祭りには、町に村に、唯一にして最大のイベントであった。青年たちは、この日を待っておめかしし、大スターそのけのお洒落で、モボ(モダンボーイ)であり、モガ(モダンガール)であった。少年・少女たちは、ひたすら、浮き浮きして社の周りを徘徊した。祭り最大の中心イベントは荒神の舞いである。

よもやと思いきまかとも思った。い

ま目前で荒神が舞っているではないか。荒神との再会に、深く感動し、密かに涙する。論理と思想を越えて、神話の世界に有難うといたい。何故なら、過ぎ去った時代を、これほど克明に回想させてくれるのは、やはり情緒の世界である。ここは思想・信条を越えて大方の理解が得られるものと勝手に決めさせていただこう。

懐旧の念ひとしおのものがあるのと同時に、心強いものもあった。新入会

員の紹介である。

壇上に立つ彼等と彼女たちの、何と初々しいことか。ちよっぴり照れてはにかむ姿に、竹田高校関東同窓会は、新しい血を得て久遠であると思う。将来、関東に根を張り、ふる里、竹田の関東支店として、郷里の後輩たちを受け入れ、不滅の火をかざし続けてくれるにちがいないものだ確信する。

宴席のスケッチを少々――

「すると、あなたは〇〇ちゃんの二男坊な。目鼻立ちがそっくりじゃあ」

「あん親父にい、こげん別嬪が生まれるっちゃんあ思わんじやっただで……」

「あん大学は難しいのい、よう受かったなあ。勉強しち出世しなあえ。期待しちよるでえ」

多分ほとんどが恐る恐る出席した、新入会員たちではなからうか。立ち居振舞いがぎこちない。固くなって、立食の皿をなかなか手にしない青年が居た。そして、不亂に食べる美女が、ふと気がついたのだろうか、「肉を少々、野菜をたっぷり」盛りつけた皿を運んできてくれました。

世間は、現代の若者の姿を問い、その生きざまを批判するが、こと竹田においては違うのだと確信する一齣であった。

ふる里、竹田は、いま仕方なく眠っているのだと思う。今日の経済情勢では人口の減少は否めない。

だが、関東同窓会の盛況を思うとき、ふる里、竹田は、必ず再生する。竹田を支える力が、伝え聞く地元の若者たちの活動、そして関東同窓会の諸兄弟の活発な行動にあるからだ。



クラス会

卒業五十周年記念クラス会

安部 正之

(昭・20年卒)



関東から参加するののためだったのですが、五十周年記念同窓会ということなので、五月二十九日開会一時間前の午後五時過ぎに会場の別府市「ホテル

ル白菊」に入りました。受付で会費を払い手続きを済ませ、割り当てられた部屋へ行き先着の同室の方に挨拶する間もなく「浴衣に着替えて懇談会場へ集合」の連絡があり、急いで着替えて部屋の施錠をし十階に入りました。

先ず、渡辺写真館長による記念撮影があり、谷川代表世話人の挨拶があり懇談会になりました。五十三人という大勢の出席者なので、全員の自己紹介等で時間をとられることもなく、全く適切な進行であったと思います。

五十年の歳月を経て皆貫禄十分な風貌となっているものの、往時の面影のある人、全く分らなくなっている人、名簿を見ながら懐かしみました。

席から余り離れず近くの方々と話し込んでいくうちに時が過ぎ、白菊自慢の料理にも余り手をつけることもなく御開きになりました。ホテルのバー、カラオケに多数の人が流れたことと思いましたが、私は長旅の疲れと緊張でくたびれて部屋に戻りそのまゝ寝に就きました。

翌三十日はゴルフ会でしたが、私は帰京の手配をしておりましたので、北浜のバス停から空港に向い正午の航空便で羽田に帰りました。朝倉三郎さんと御一緒でした。出発前、白菊ロビーで、川島さん、伊東昭英さん、平田信幸さん、伏伯恭二さん、首藤雄一さん

等と別れを惜しみ、川島さんのカメラで写真を撮って貰いました。帰京の飛行機は朝倉さんと席が離れていたの、話し損った人々との想い出を懐しみ、参加出来なかった人、亡くなられた方々との想い出に浸りました。

同室の方々は関東からの足立五郎さん、伊東昭英、広島からの池田さんで、部屋割り、名簿の作成その他、発起人の方々、谷川代表世話人世話人の方々の行き届いた御配慮に感心致しました。

後藤市長、足立校長等地位ある方々には申し訳ないのですが、会長来賓等の挨拶もなく、世話人での運営は形式張らず往時の学生時代の対等な立ち場での会合となり、全く楽しい一夕でした。それだけに世話人の方々の心遣いは大変だったろうと想像されます。又、会場のホテル白菊は、昭和三十

クラス会の動き

昭和26年に卒業した同期生の集まりをいつの頃からか、「二六会」とよぶようになつた。昭和28年前後に東大在学中の阿南惟正氏と明大在学中の森信久氏が幹事で神田神保町の大衆酒場「のんき」の二階に百名位集まったのが最初で、以後、東京二六会は毎年少なくとも二回は開催されてきた。その後、

関西地区、別大地区、豊肥地区、北九州、福岡地区でもそれぞれ二六会が結成され各地区ごとに二六会が開かれて

六年一三十八年、先代の社長、女将さんの頃、私は三井不動産(株)大分事務所社員で大変御世話になっており懐しく存じたのですが、当時の面影は全くなく近代的に改装されており吃驚致しました。

何はともあれ、懐かしい一夜を過ぎせて頂き感謝致しております。

想えば、昭和六十一年の四十周年記念級会は、私の二女経営の直入町長湯温泉、豊泉荘で開催して頂きましたが、あれから十年近く経っているのに皆さん御変りなく御元気な姿に接し、羨ましく嬉しく存じました。もっと沢山の方々と御話しすればよかったのにと今になって悔やまれてなりません。谷川さん、世話人の方々に厚く御礼申し上げます。

高山 茂美

(昭・26年卒)

きた。

東京二六会は平成6年6月10日金午後6時から幹事の和田昭昭氏(博報堂役員)の御世話で同社内の博報クラブで開催し、37名が集まった。会場探しは男性幹事、当日の会費徴収は女性幹事と役割分担がいつの間にか定着した。美人の松田(平井)常子幹事に受付け「お釣りは不要」という会員もいた。会合費の剰余金は慶弔費(と言っても殆んど弔費)に充当することに



なっているので寄付は大いに助かる。

東京二六会はセレモニーがなく、幹事の短い挨拶が終わると直ぐ乾杯となるのが、酒好きの多い会員には好評のよう、中には竹田時間で現れる仲間を待ちきれずにお先に一献という者もい

(3ページへつづく)

クラス会

る。幹事も心得ていて出席予定者の半分位揃えば乾杯し、全員ほぼ揃ってから再度乾杯となる。お互いに還暦を過ぎて定年退職者も増えてきた。話題も、肩凝り、腰痛、老眼などに集まりがちだが、面白い話として阿南惟正氏の新日鉄副社長就任が幹事から披露され同氏から就任に際しての簡潔な挨拶を貰った。同氏以外にも社長、副社長はいるが、新日鉄となると別格で、東京二六会としても就任に際してスピーチを要請したのは異例のことである。

東京二六会は幹事持ち廻り制で今回の幹事を後藤光夫、杉本(小代)章子両氏にお願いした。12月上旬に開催予定。これとは別に二六会の全国大会が福岡市で11月上旬に開催予定でそれへの参加も話題となった。

当日の参加者は、阿南惟正、安藤(楢木野)康子、伊藤瑛介、今永博彬、牛島(前田)健一、大崎貞雄、大友瑠璃子、大橋(阿南)知子、神田清、久々宮久、河野(益城)テル、後藤光夫、小堀正一、佐藤収、佐藤和範、佐藤健士、佐藤光志、里見菊雄、杉本(小代)章子、高松(上村)悌子、都築義範、戸上昭、長吉泉、浜田高盛、日小田秀幸、藤本健次、測野修、別府正克、松田(平井)常子、馬弓良彦、宮原昭造、吉田(小倉)妙子、和田公昭、和田二士、渡瀬和子、渡辺(後藤)敏子の諸氏と高山茂美で計37名。内、河野氏、佐藤和範氏は名古屋からの参加。

竹禄会「自分史」の名著

尾 西陽 (昭・29年卒)

昭和五九年、竹高第六回卒業生総会が、卒業以来三〇年ぶりに開かれた。この時に、総会名を「竹禄会」と呼称する旨が発表された。

竹田高校の竹を冠に戴き、第六回卒業の六に語呂を合わせて禄を配したものである。ちなみに広辞苑の禄を引くと「天から与えられるさいわい」とある。実にめでたい洒落た名称だと、命名した幹事諸兄弟のセンスの良さにたいく感心したものだ。

以来、五年ごとに竹禄会は開かれてきている。第二回目は平成元年に別府温泉で、第三回目は今年、一〇月九日、再び竹田に懐かしい面々が集った。会場のホテル岩城屋で、定刻午後三時に開会された総会は、式次第にしたがって淀みがない。淀みはないものの、会長挨拶と校歌斉唱には、心中深く行む何かがあった。

演壇に立つ田部誠会長の挨拶に、
「どうか今年は有りませぬように」と密かに祈る一節がある。

会長の挨拶が、ほんの一瞬間途切れる。矢張りと思ひ、仕方ないことだとも思う。この五年間に、幽明境を異にした三人の友の報告であった。一分間の冥福を祈る黙禱が、この上ない切ない思いで過ぎる。

そして、校歌の斉唱——。
校歌には当然のことながら、高潔にして厳たる格調が備わっていて、近寄

りがたいものすら感じる。

しかし、いったん口にする、その詩と旋律は限りなく優しい。すっかり忘却していた青春時代の一瞬を、記憶の奥底から不意に連れ戻してきてくれた、思わぬ感動を得させてくれる。

一六歳で初めて誇らかに歌い、いま還暦を翌年にひかえ懐旧の念をこめて歌う。

歌い出しこそひかえ目であったが、やがて力強くなり、その様子は正に、

「秘むるは久遠の焰」であり、還暦から古稀、傘寿、そして更にその先の続きを確信させる。旅路をつづけてささやく。元氣そのものであり、ふるりの弥栄を祈る。ひとしくめでたりこの郷土のエネルギーを大合唱の歌い上げであった。

歌い終えて幾分上気した顔がさざめいて鎮まる。乾杯である。

恩師であり同窓会長の田北和義先生の音頭で、竹禄会五年ぶりの再会と歳月を一気に飲み干す。

ここから時計は、回転を左にとり始める。

各自が定められた席についていたのは東の間であった。たちまち座は乱れて、友の名を昔に戻って呼び捨てにし、ちゃん付けで捜し、旧交を暖め合う。不慮にして乱雑、日常の袂を脱ぎ捨てた損得のない仲間たちである。快い酔いのうちに、昭和二〇年代後半

が再現されていく。飛び交う会話は、いまは無い木造の学舎のなかのものが、あり、陽光に汗したグラウンドの土の香りである。

「合宿所じ、蚤に食われちなあ……」

スポーツマンのTとKの会話である。そういえば、グラウンドの隅っこに馬小屋のような、いまにも倒れそうな合宿所があった。まったく記憶から消え去っていた細部が甦るのもクラス会ならではのことであろう。

あちこちで哄笑と爆笑が小渦を作り、大渦を巻く。

座は乱れに乱れる。

「美は乱調にあり」との名言がある。云いえて妙だと思う。肝胆相照らす仲間との語らいが、雑然の輪をつくり、渾然一体となって盛りあがる。だからクラス会なのだと思ひ、これがクラス会なのだと思ひも確信する。

いささかセンチメンタルになるが、

その有様は、友情は乱調にあり」と形容し、少々雅語的に表現すれば、有難きかな同胞たちよ」である。

談笑に耳を傾ける。

「あん頃は、外食券の時代じゃった。メシが足らんじ、ひもじいぢゅうたらなかつたでえ」

「円が一円上がった、下がったで大騒ぎしちよるけんど実感がねえなあ。あん頃は、五円、一〇円の話ならお金有難さが分かるんじやけんとなあ」

「孫が、うちんことをバアちゃんち呼ぶんじやわあ。オバちゃんち云えちゅうて教えるんじやけん、バアちゃんちしか云わんわあ。本当じゃやいしょうがねえんじやけんとなあ……」

そうか、そうなのか、そうだよ、とすべてに相槌が打てる。うん、うんと頷きながら考えた。

それぞれが、何気なく語る懐旧談が見事な「自分史」を描き出しているではないか。配布された出席者名簿には一〇五名が名を連ねている。

何人と話をしたかは覚えていない。そしていま思うに、宴の後の寂しさは否めないものの、一〇〇冊前後の「自分史」の名著を読ませていただいたことは間違いない。

心底より有難う。そして未完の「自分史」の続編を、私も共著者として、何時までも書き綴っていきたい。なお、母校竹田高校には、記念に金木犀を贈った。何時までも芳香を放ち続けてもらいたい、という願いを込めて……。



先輩を訪ねて

お客様
とき
ところ

三宅 善喜様
平成六年九月二八日
伊東法律事務所

聞き手
記録者

足立五郎
三尾まゆみ

健康そのものようにお見受け致しますが。

三宅 七、八年前から左耳が全く聞こえなくなりましてね。二人だけの対談なら大丈夫ですが、多人数だと聞き取れないことがあります。日常生活も不自由はないのですが、他は全く病気が知らずです。酒は食らうは、タバコは吸うは。今も三合は欠かしません。暇に任せて計算したら、この六十年に内輪に見積もってもドラム缶で七十



三宅 善喜氏略歴

大正5年3月生。昭和8年竹田中学校卒業。15年日本大学理工学部土木工学科卒業。清水建設入社。16年4月~17年4月海軍施設部技手徴用。18年9月陸軍航空本部・比島ミンダナオ島ダバオにて特別野戦飛行場設営隊技師として飛行場設営に従事、20年12月末復員。51年3月、清水建設定年退職。51年4月(株)浦和土建工業に東京支店長として入社、61年11月満70歳で円満退社。

三本は飲んでいますね。

—— 凄いですね。ドラム缶で計るとは。クラス会には何人くらいの出席者がありますか。

三宅 毎年、実施してはいますが、二十四、五人は集まります。卒業したのは百二十三人ですが、現在生きているのは五十人くらいです。今年も十一月にいたします。二十人は下らないと思います。

—— 昭和八年当時の東京の学生生活の一端をお聞かせください。

三宅 私は昭和八年三月十日の陸軍記念日に上京したのですが、あの頃は本当に楽しかったですよ。あの不景気時代の貧乏人が大学まで出られたのですからね。特に友達があり難かったですよ。当時月に七、八十円も親から仕送りしてもらう人がいましたね、ずいぶん世話になりました。そんな友達のおかげで卒業できたようなものです。日大工学部は昭和四年にできたんですが、私は十五年の卒業です。一年落第したので、十四、十五年卒の二クラスに所属しています。あの頃はクラスの半分は落第していましたからね。当時土木工学部は、帝大以外にありませんでした。私大では、日大が最初でした。



就職難はもう解消?

三宅 それがまた難しく、私大出身者で清水建設に入社したのは私が第一号でした。

—— 海軍施設部ではどんなお仕事をおこなったのですか。

三宅 清水建設入社一年後に、在籍のまま海軍に徴用されて朝鮮(現在の韓国)鎮海海軍施設部技手になりました。山を削り貫いて爆弾庫にするための大きなトンネル工事の現場監督をしました。その頃の軍属文官は、召集免除の手続きをしなければならなかったのですが、海軍が忘れていたのか、陸軍から召集令状がきました。海軍もあわてて召集中止の交渉をしてくれたのですが、陸軍は聞いてくれないので、陸軍工兵隊の二等兵になりました。ところが三カ月の教育が終わると隊は解散になったので、東京の本社に戻りました。それが十八年の九月

に急に昭南(シンガポール)支店に行けという社命。何か様子がおかしいと思っただけで断れなくてね。実は支店勤務なんて真つ赤な嘘。陸軍航空本部から会社に、清水建設部隊を編成するよう指令が出ていたのです。独身の私に白羽の矢が立てられたようです。

—— 何も知らずに集合場所に行ったら、そこは航空本部でした。戦地のどこかに飛行場を建設する部隊とだけ知らされて、輸送船に乗り込みました。着いたところがミンダナオ島でした。

—— そのでの仕事、生活についてお聞かせくださいませんか。

三宅 勝っているうちは楽しかったですけどね。忘れもしません、昭和十九年四月二十九日、皇居遥拝をしようと思ったらダバオ湾に百隻余のアメリカの軍艦、朝八時になったとたんヒュードカーン。それからひどいものでした。島には二つの飛行場を建設しましたが、アメリカ軍はそれを基地にしましてね、散々やられましたよ。

—— よくご無事で。終戦は、何時どのようにお知りになったんですか。

三宅 二十年九月二十日、谷の向こうからラウドスピーカーで、「日本の将兵に告ぐ、戦争は終わりました」という呼び掛けがあったんです。集合場所という小学校を覗きに行ったら、日本兵がうようよいました。ああ、よくこんなな生きていたものだと思えました。「日本は負けたんだ、東京に帰らせて貰えるよ」と日本兵に言われて急に里心が起きて収容所に行きました。

—— その後がまた戦後の復興で。三宅 収容所で雑誌のライフを見たから、焼け野原となった主要都市の写真が出ていました。

浦賀に上陸、すぐに本社に行きました。ビルは本社と味の素しか残っていませんでした。これは駄目だと思って竹田に帰りました。四カ月ぐらいすると九州支店から職場に復帰せよとの連絡がありましたので、別府を皮ぎりに足掛け五年九州の現場にいました。

二十五年、大阪支店に行つて地下鉄工事。名古屋支店で一番苦勞したことは、水力工事でした。断層にぶつかった時は一メートル進むのに何カ月もかかることがあります。本社に戻つて二十年、内動生活をしました。

—— 郷里や後輩に一言。これからなざりたいことがございましたら。

三宅 まず後輩には大学への進学を勧めたいですね。大学は決して無駄ではありません。ドイツ語の授業で、「負傷は一時の休息であり、戦死は永遠の休息である」という一文習ったことを戦地で思い出してね。「これは、内地とつながっている時のことだ、諸君は負傷したら終わりだ、ケガをしてもいかにぞ」、なんて兵隊たちに言ったものです。こんな一言でも学校に行っただかいがあったと思います。これからやりたいことは、後五年は生きて新しい二十一世紀を見極めたいですね。—— 有難うございました。是非二十一世紀見極めてくださいますようにお元気で過ごしてください。

会員の語らい

私の健康法

後藤 鉄石
(昭・10年卒)

キンさんギンさんの話を聞いていて、何故長寿の秘訣なのか判りません。ニコニコと「氣力」だとか「根性」とかいえばかりで矢張り体の出来が人と違うのかと、面白いけど余り参考になりません。

しかし昔の人で四百年前の天海僧正(108歳)と二百年前の貝原益軒(84歳)の二人は流石に学者だけあって、立派な教訓を残しています。

私の健康法の寄稿を求められました。が、天海の教えを中心に小生の心掛けている健康法を加味して御参考に供し度いと思えます。

家康の師匠の天海僧正は仏教の高僧であり乍ら、道教学の学僧でもありません。江戸の安寧のため目黒、目赤、目白、目黄の四不動を開き、目黒、目白は現在の駅名に目黒は区名にまでなっています。又四谷赤坂等の見付や木戸をつくらせ、家康の没後は日光、寛永寺、川越の諸寺を開きました。人に長寿の秘訣を問われると教えた教訓が四つありました。簡単なので覚え易く、且つ現代の長寿理論に大変マッチしています。

(1) 毎日風呂に入ること
入浴すれば血行もよくなるし、気分もゆつたりと寛ぐし、何人も異論ない

(2) クヨクヨしないこと
いやなこと、苦しいこと、悲しいことがあってもクヨクヨしない、腹が立つても怒らない。出来たら笑ってすこすこ。

これは道教の基本的な教えですが、実は健康法の基本と思います。現代流に言うところストレスをためないのが大切であらゆる悩みが病気の原因になると言われます。かつては生長の家の谷口雅春という人が言われ、今は血液学の泰斗が力説しています。つまり怒ったり、悲しんだり、悩んだりすると、体内で血液の粘度が増し固まってくる。その結果重大な病変が起るということです。クヨクヨしないことが大切です。

(3) キナコを食べること
天海が何故キナコに着目実行したのかは判りません。キナコは煎った大豆の粉で現代アメリカでは健康の基の様に推奨されプロテインとかレシチンの名で日本薬局法にも入っています。

(4) 最後は便通をよくすること
便秘は、肥満の原因ともなり健康の大敵で、腸内細菌の作る有害物質が老化の原因という現代理論と合致しています。

諸行無情の昨今

野本 龍介
(昭・20年卒)



皆様には
暑中御機嫌
麗しくお過
しのことと
拝察申し上
げます。

去年のような冷夏凶作も辛いですが、水不足という今年の酷暑もまた酷く、これ天のなすわざと言ひ人為の及ばない領域には降参。千年に一度の天体衝突では直径二千キロの大火球、宇宙からは、奇麗な青い地球が浮いて見えると向井さんからの報告。宇宙サイドから人間は、地球破壊の微菌と言うこと

昔には
暑中御機嫌
麗しくお過
しのことと
拝察申し上
げます。

その微菌である私共老夫婦の惚けは混乱期を迎えて立ち枯れ寸前ながらも達者が一番の瘦せ我慢が身上。中学校生の孫には見捨てられ、老人割引児童並みとは嬉しく「平成ボンボコ狸合戦」にと、デートの相手は小学生の孫一人となる。お陰様で屈託なく酷暑のなかを喘ぎ喘ぎ過ごしております。

流水腐らず使う敏は錆びずの論しあり、弾圧なき政治の流動は大歓迎なれど、筋書は三流で議員の歳費が勿体ない。飄箏から駒が出たよと社党のトンちゃん総理となり、政治改革の仕上げ

といくか。
生者は必ず滅すると、宇宙でイモリが昇天し、キムさんが逝った。嘆く人民の姿は、戦中の帝国日本の姿に似るを感じて気味悪るし。

日本の経済バブルと弾け、かてて加えた円高に産業界は青息吐息。人は哲理を求めてか「低く暮らし、高く思ふ」との良寛さんを仰望する。慌て焦るまい、無理もしまし、分相応にそろりそろりと参ろう。世の中、総てが諸行無情なりと実感する今日この頃です。

御家の皆様の御自愛と御健勝のほどを祈念申し上げます。

平成六年盛夏



会員の消息

今回の「先輩を訪ねて」の三宅善喜氏が、次のような本を出版。
書名「私のグバオ戦記」
編集(株)日本PRセンター
印刷 (株)昭和プリント
「南方支店勤務」のはずが南太平洋戦線の最前線、フィリピンにグバオへ。

灼熱の太陽の下、異国情緒たっぷりの南国生活があったが、米軍上陸と共に一瞬にして地獄に変わった。誇り高い民族は昼なお暗い密林の中に大和魂を捨てた。三十五年間、片時も消えることの無かった鮮烈な記憶、運命的な使命感にも似た心のうずき、一土木技師にペンをとらせた。

(私のグバオ戦記の本の帯より)

内科・小児科

朝倉 医院

院長 朝倉 三郎
(昭和・20年卒)

東京都北区東十条5-9-17

TEL (医院) 03-3902-5275

(自宅) 03-3902-5369

知っちよるつもり
その2

日本最大の摩崖仏

九州のアジサイ寺 普光寺

工藤裕一
(昭・28年卒)

地に誘い込まれる。

籠(がん)の上縁に、庄屋堀直方十
六歳の書と言われる「筑紫山普光寺」

の大文字が彫られており、今は第十五
代住職牧智山師が法燈をまもる真言宗
の古義派の寺で、千五百株もあるアジ
サイ寺としても有名で、観光客の人気
が高まっている。

も中川久清は、岡城の鬼門に当たると
言うことで、僧有慶を遣わして、寺の
再興をはかった。有慶は、左の籠に金
剛界壇上曼陀羅(だんじょうまんだ
ら)を造り、本堂を胎藏界とし、護磨
堂を設け、真言宗密教寺として再興を
はかったのである。

普光寺縁起によると、敏達天皇の十
二年(五八三)の頃、日羅律士(にち
らりっし)の開基とされ、源平時代に
は大野の荘、志賀村「泰山筑紫尾寺普
明院」と呼ばれる天台宗の寺であった
が、鎌倉時代になって、大友氏が豊後

名も筑紫尾寺は畜生と聞かえるとこ
ろから、筑紫山普光寺偏月院と改め
た。世にこれを中興開山と言ってい
る。普光寺と言われるようになったの
は、この時からである。

に入り、能郷は
この寺の院主職
を兼ねるなど大
いに保護するこ
ととなった。室
町時代の終りに
大友は島津との
対立の中で滅亡
していき、文禄
三年(一五九
四)豊臣秀吉が
藩州三木城から
中川秀成を岡城
へ国替えした頃

岡城主中川公は、代々、普光寺の復
興には力を入れ、田畑扶持米の寄進は
もとより、久恒公は左台地に護磨堂を
建てて、大いに加持祈禱を勧めたと言
われる。

竹田の川下から濁淵を経て、トンネ
ルを抜け三宅坂を上り、老人ホームの
側から右手に別れる道を少し登ると、
そこは見晴らしの良い岡藩時代の参勤
交代道路である。通称田尾道と呼ばれ
ており、これに沿って普光寺や用作
(ゆうじやく)公園があり、いまは古
くて新しい観光ルートである。
この道を東に進むと、有縁寺(うえ
んじ)から普光寺道が別れている。
分岐点に、右手に宝結(ほうこ)左
手に念珠(ねんじゆ)を持って、普光
寺をさした「道しるべ地蔵」がある。
高さ七十センチ程で「三界方靈右ふこ
うじ江」と書かれており、安永七年(一
七七八)のものである。

鬱蒼と茂った銀杏や樟の大木に囲ま
れた山門を入ると、その奥に古刹(こ
さつ)がひっそりと佇んでいる。

寺の正面には、高さ四、五十メー
トルもある切り立った崖に、ぽっかりと
大きな口をあけた二つの岩屋と、西日
本最大と言われる大不動明王の摩崖仏
が、忿怒の形相でこちらを睨つけてい
る。
雨が降ると、火焰光景がくっきりと
浮きあがり、浮世と隔絶した荘厳な境



は、長い戦乱に
荒れ果て「六坊
既に絶えて中の
谷坊のみ火一つ
とる」と記さ
れている通り、
今の寺中の坊だ
けが、かろうじ
で残っていたの
である。なかで

庫裏は、江戸期には長さ十五間も
あったが、明治三十八年、老朽化のた
め半分縮小、奥にあった本堂も、現在
地に移したものである。現代アジサイ
の群生した斜面からは、布目瓦がたく
さん出土し、在りし日の盛様がしのば
れる。
主な仏像
右龕
多聞寺(毘沙門天) 磨崖三メートル

- 弁財天 磨崖
- 護摩堂 五大明王
- 撫で仏(地蔵) ○、七八メートル
- 左龕
- 大日如来 金剛界
- 諸仏八十体六壇
- 小不動明王 磨崖 一、六メートル
- 二童子 一、一三メートル
- 阿弥陀如来 一、〇六メートル
- 左端
- 大不動明王 磨崖 八、五メートル
- 衿迦羅童子 磨崖 五、五メートル
- 制多迦童子 磨崖 五、四メートル
- 水子童子 ○、四メートル
- 大日如来 大師像 観音像など
- (きかいがあったらよちちみちよくれ)

渡 辺 写 真 館

渡 辺 通 男

(昭・20年卒)

大分県竹田市中本町377-2
TEL 0974-63-2234

ふるさと便り

竹田市の新庁舎が完成

歴史文化のかおる町に新名所

大塚 敏雄

(竹田市商工観光課)

先日、竹田市は市制施行四〇周年並びに新庁舎落成の記念式典を平松大分県知事をはじめ多数のご来賓のご臨席を賜り厳粛かつ盛大に開催することができました。この喜びを市民とともに分かち合いここに報告する機会をいただき誠にありがとうございました。仕事で、また私用で大分に帰りましたら是非新庁舎を見学いただければ幸いです。

さて、竹田市が誕生したのは、今から四十年前の昭和二十九年三月、二町八村が合併して市制を施行、市庁舎はその翌年の三十一年旧豊岡小学



竹田市新庁舎全景

校跡地に鉄筋三階建てを建設、以来今日まで三十八年間市政推進の拠点としてその機能を果たしてまいりました。

しかし、この間、次のようなことがありました。昭和五十三年には庁舎別館として使用していました木造建物の老朽化が著しくなった為取り崩し、玉来阿蘇に第二庁舎を開庁しました。その第二庁舎が平成二年竹田地方を襲った梅雨前線豪雨により玉来川が氾濫、濁流が庁舎を直撃し壊滅的被害を受けました。このことにより市の行政事務は五箇所に分

散を余儀なくされ、市民サービスは最悪の事態となり不便をかこっていました。これを打開するため、平成四年二月市議会で庁舎を七里地区に移転することを決定、庁舎建設に取り掛かりました。

新庁舎の設計は、市民のための市庁舎、簡素で機能的、竹田市に相応しい庁舎をコンセプトにコンペを実施、平成五年三月に工事に着手し一年余りをかけて本年四月に完成しました。

新庁舎は、鉄筋コンクリート四階建てで延べ床面積は約五、六〇五、平方メートル、事務室は総てオープンスペースとし、一階には市民課をはじめ市民と接することの多い七課を配置、市民ホールもスペースを広く取っています。また、四階は展望室も設けるな

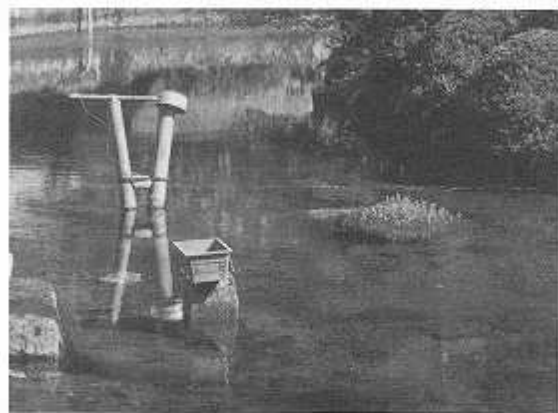
ど市民、来訪者、職員の交流の場として開放しています。

新庁舎は、城下町、また歴史と文化のかおる町「たけた」にふさわしい和風の建つ物で周りの自然ともよく調和しており、これまで相次いで建設されたJR豊後竹田駅、竹田商工会議所、竹田郵便局、県総合庁舎などの和風建て物とともに竹田の観光復興に一役買ってくれるものと期待しているところであります。

新庁舎の建設を契機に私ども職員も決意を新たにしているところであります。今後ともよろしくお願い申し上げます。最後にになりましたが、貴会のますますのご発展と会員、会員ご家族皆様方のご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。

竹田名水観光有有限会社

高野 将(昭・38年卒)



河宇田名水

竹田市の名水は祖母、傾山系に降った雨や雪が長い年月をかけ濾過され、火山岩の亀裂から豊富に湧き出ています。名水田園都市竹田の湧水群は、昭和六十年、全国に先駆け名水百選に指定されました。この名水の特徴は、適量のミネラル(カルシウム、マグネシウム)を含んでいることで、健康にも良く、非常においしい水です。冷してそのまま飲んでも、あるいは、お茶やコーヒー、紅茶、ウイスキーの水割りや焼酎のお湯割りにも最適です。

昭和六十年この名水を製品にし、名水による地域おこしを行うべく竹田名

水観光(有)が設立されました。当社は竹田商工会議所の青年部OBを主体とした「企業おこし研究会」会員の中から設立しました。

当社の製品は加熱による殺菌処理をしておりますが、現在では竹田の名水が持つ独特のおいしさを逃さないように非加熱処理(紫外線殺菌)をしています。

これまでは、一〇〇ccの製品が主流でしたが、携帯に便利、更に手軽に多くの人に竹田の名水を味わっていただくよう、三〇〇ccのミニボトルも用意しています。今年の夏は全国的な水不

足で名水の需要が非常に多かった一方、先日久住町で開催された第十一回日本ジャンボリーでは、会場の大分県一村一品コーナーで、皇太子殿下にも飲んでいただきました。

これまでは、名水の充てん等に人手によるところが多く、多くの需要に対応することが出来ませんでした。設備を改善し効率化を図り、より多くの需要に対応出来るよう考えています。

また、これまでの製品では、お中元の贈答用として定着してきていましたが、これからは販路を更に開拓し、より多くの人に、関東同窓会員の皆様にも手軽に郷里のおいしい名水を飲んでもらいたいと思っております。

あとがき

★慌ただしい年の瀬が迫って来ました。皆さんいかがお過ごしでしょうか。

★今回も広報委員の異動のお知らせです。臥牛創刊号からご協力下さった吉場伸子さん・八木洋子さん両名が先号(十号)をもって委員を辞められました。多年にわたるご協力に感謝いたします。替わって、斎藤美佐子(昭和・42年卒)さんが仲間入りしました。

★かく申す足立も、広報委員長および広報委員を辞めさせていただきますことになりました。「臥牛」という同窓会広報紙をどうやら形にすることは出来ましたが、マンネリの恐れが出てきました。身を引かせていただきます。臥牛のますますの発展を願っています。有難うございました。(足立)